

平成 27 年度

事業所名 : グループホーム 城山の杜(2丁目)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0392900031		
法人名	株式会社信樹会		
事業所名	グループホーム城山の杜2丁目		
所在地	上閉伊郡大槌町大槌15-5-1		
自己評価作成日	平成28年3月3日	評価結果市町村受理日	平成28年5月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=0392900031-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 28年 3月 16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは、近隣に病院やコンビニ、スーパーマーケット、郵便局などがあり町内でも利便性の高い地域に立地しております。
開所以来、ホームで働く職員の技術や経験も年々上がっており、その中で幾度の看取り介護を経験してまいりました。
これからも今までに積み重ねてきた介護の技術や経験を活かし、入居者のみなさんが住み慣れた場所でいつまでも自分らしく暮らしていけるよう支援してまいります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設9年が経過するなか、昨年3月に定年等により大幅な職員の入れ替えがあり、また利用者も三分の一程度づれが変わり、変動の激しい一年であった。人員の補充が進まず、元の体制に戻ったのは今年に入ってからであった。その間、介護度4、5の利用者が増え職員の負担が増大する中、以前からの職員が中心になり利用者の支援に全力を注いできた。経験の少ない職員も少なくないが、全スタッフでチームワークを組んで新しい「城山の杜」を創るべく努力を続けている。利用者は落ち着いて安らいだ表情の方が多く、職員とのやり取りもごく自然で信頼関係が出来上がっているように見受けられる。当地は震災後多くの仮設住宅が建てられ、最近は一戸建ての災害復興住宅も建つなど変貌も激しいが、新たな地域コミュニティの形成が計画されるなかで、当事業所も地域交流を通じて地域との繋がりを強め、地域居住の高齢者支援等に貢献することが期待されている。地域状況も含め事業所として大きな変節を迎えながら、人と人の信頼関係を見つめ直し、新たな協力関係を構築中の事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム 城山の杜(2丁目)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入所者の意思を尊重し安全に気を配り努めている。掲示しているが新しい職員には周知されていない。	職員の入れ替えが多く、職員間での理念の共有が不足していると感じている。利用者の思いや希望に対応しきれていない反省もあり、話し合いの時間をつくり、理念や運営目標に基づくケアの実践について全職員で再確認することとしている。	新人が多いことから職員全員で、介護施設で働く意味、利用者との関係など意見交換を行いながら共有認識を持てるような取り組みが望まれる。そうした中で、現在のスタッフにより新たに運営目標を掲げるような機運が醸成されることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	施設周辺の方が引っ越され交流の場がなくなった。趣味や好きな場所に出かけている入居者もいる。	三陸自動車道が通るため、近隣の方々が殆ど移転し、近所付き合いが激減している。こうした中、町内の傾聴ボランティアのグループが月2回程度来所して利用者と交流してくれる。今年から改めて地域の幼稚園や小中学校との交流を手始めに地域との繋がりをづくり直す取り組みを始めたとしている。	地域状況が今後激変していくか明確な計画に沿って地域連携を進めるということは難しいが、今あるつながりの大切さを再確認しながら、長期的な見通しの中でこれからの新しい出会いやコミュニティ創造への希望を育てていってほしい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前に講習会を開催したことはあった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	意見を支援サービスに取り入れている。	町議も含め地域住民の代表が3人加わり、活発な意見交換がなされている。退職が続く職員不足に陥った際には、委員の皆さんが心配し応募者を紹介してくれるなど、事業所の運営に理解と協力を得ている。今後は運営推進会議の支援を得ながら地域交流の活性化を図りたいとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	会議等へ参加し情報共有している。	町のケアマネ会議の場で地域包括や担当者と話し合う他、運営推進会議のメンバーとして行政の立場から種々情報を提供してもらっており、円滑な連携、協力関係にある。職員の大幅な入れ替えがあった時期も、その都度報告し了承を得ながら運営している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	どこまでが身体拘束か改めてケアマネ職員間で話し合いケアに取り組んでいる。見守り強化、拘束しない支援。	特に言葉による拘束に注意しており、前後に言葉を添えながら、直接、否定、拒否の言葉にならないよう工夫している。訴えの多い利用者には出来るだけ要望に沿うようにしているが、家族の理解を得ながら一定程度希望を制限することもある。身体拘束や虐待に関する外部研修を受講し、報告研修で内容を共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の徹底を努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用している入居者はいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時十分説明し理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情ご意見箱を設置し面会時に要望を取り入れる努力をしている。	利用者とは日々の会話の中で要望や希望を確認している。家族からは、支払い等で来所した際の話し合いの中で意見等を聴取している。家族会の代表が運営推進会議のメンバーになっているが、会自体の活動は休止状態にあり、活性化のため、行事に併せてお茶会等家族同士の交流の場を工夫したいとしている。	家族からの率直な意見は、事業所の今後の方向性や職員の意識共有にも大きな助けとなっていく。徐々に職員体制が落ち着いてきたら、家族会の再開も検討してみたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティング時に意見を提案している。	ユニット間の連携や意見調整のため2ヶ月に1回「ユニット会議」を開催し、利用者の状況確認を始め、運営等に関する意見交換を行っている。新しい職員も多く、運営に関する改善要望や提案は少ないが、今後、代表者も交え、全員で話し合える場を増やしたいとしている。	職員の顔ぶれも変わり、スタッフ全体でコミュニケーションを図ることも必要と思われる。アフター5も含め、仕事に対するお互いの考え方や思いを忌憚なく話し合う機会をつくるのが望まれる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本人の努力や実績等に応じて評価されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に参加する機会は多くない。参加者による報告会にて周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会参加時に他の参加者と情報交流している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者に対して傾聴し職員間で情報を共有し信頼関係を築くよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前後要望や困っていることを取り入れている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者と家族の方の意向が違う事で苦戦している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者から感謝されたり感謝したりの関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の意見を尊重し家族の意向を取り入れ支援していくように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な限り支援している。	習字、お茶等の習い事を行う方や入居後も外部のコーラスグループに参加し、仲間の協力で県外に遠征した方もいる。また馴染みの美容室に定期的に通う方もいる。職員体制も整ってきたことから、外出の機会を増やし、一人ひとりの馴染みの場所等を廻ることとしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者が嫌な思いにならないようテーブルの席替えホールのソファの座り方など		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も気軽に相談できる関係を築いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者家族の希望を傾聴し安心して楽しく暮らすよう努めている。	職員が利用者と会話を楽しむ時間を多くつくるよう努めている。思いや希望を話してくれる方は多いが、外出、食べ物に関する希望が多い。事業所での出来事や一人ひとりをよく観察している方もおり、時的確な意見を出してくれる方もいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	職員間で生活歴など把握どうしたらいいかユニット会議で話し合っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者の生活のリズムに合わせて介護している。バイタルチェック、生活観察		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人はもちろん家族や主治医看護師等関係者から意見を聞いて作成している。	計画作成担当者が作成した計画を、職員1人当たり3人程度の利用者を担当して3か月毎にモニタリングを行いながら、6ヶ月単位で見直し変更を行っている。新しい職員に対しては、介護計画を意識してケアを行うよう指導しており、計画と異なるケアを行っている場合は修正を指示している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録、伝言メモノット申し送りユニット会議で情報共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	可能な限り支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアの来所数ヶ月に1回くらいの割合で外食買物ドライブあり。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院等の家族の負担減らすため嘱託医の話もしている。	近くの協力医を中心に看護師が付き添いながら定期に受診している。協力医は予防注射や緊急の診察に来所してくれる。看護師は医師と適切に連絡を取ってくれ、家族にも受診結果を個々に報告してくれるなど心強い存在になっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者も職員も看護師の存在は大きな安心感がある。情報共有している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	看護師が医療機関と上手く連携して情報収集しそれを介護職員で共有している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用開始時に現時点での思いを聞き取りあとは随時変更がないか確認している。	重度化や看取りへの対応の考え方を家族に説明し「意向確認書」を貰っている。現在は看取り対象の利用者はいないが、先に備え、時折、看護師が話題にして家族と話し合うようにしている。協力医の理解も得ており、看護師を中心に看取りが可能な体制は出来つつあり、経験のない新しい職員を中心にターミナルケア研修に力を入れることとしている。	職員不足から一時期対応困難だったが、新たな体制のなかで事業所では看取り支援を自分たちのアイデンティティと捉えている。「自分たちは何がしたいのか」という理念検討とあわせて、職員の意識作りを進めていってほしい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に心肺蘇生法の訓練実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防訓練実施施設周辺の近所の方も参加してもらっている。	夜間帯を想定した春秋の定期火災避難訓練を消防署立ち会いで実施している。以前はミスが散見され消防署から指摘や指導を受けていたが、直近の昨年11月実施の訓練では、適切との評価をいただいている。消火訓練(消火器の使い方等)も含め、近隣の方々にも参加いただいている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重している。その人にあった言葉かけに心がけている。	欠員が生じていた時点では、忙しさのなかで言葉かけや対応が粗く、時に本人の気持ちに配慮が欠ける場面も見られたが、現在は、職員同士で注意し合いながら誇りを傷つけないよう支援している。調理をやりたい人の気持ちを尊重し手伝ってもらっており、本人の生き甲斐になっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望思いを否定せず意思決定できるよう努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各々のペースに合わせて支援しているが業務に追われ待ってもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的訪問理容		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	お誕生日には本人の希望するメニューを取り入れられること(洗濯干したみ食器拭き等)実施している。	両ユニットの職員で「調理委員会」をつくり、一週間分の献立、食材の買い出し、調理当番などユニット合同で準備する体制を取っている。調理の得意な方も含め、全員が出来る範囲で準備や後片付けを手伝っている。誕生日には、本人が希望する特別メニューでお祝いを行う。両ユニット全員で楽しい食事になっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	各入居者の食事量や形態を考慮してできるだけ自力で食べてもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケア実施。 夜間義歯洗浄剤使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンに応じてトイレ誘導実施。チェック表をつけて汚染を減らすよう努力している。	リハビリパンツに尿取りパットを併用の方が殆どで、排泄パターンも把握されており、本人自ら又は誘導、介助によって全員トイレで用を足している。夜は何人かのオムツ使用の方を除き声掛けによりトイレに誘導している。出来る限り自力で頑張ってもらよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食前牛乳を飲んでいる。看護師と相談し下剤使用。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は決めているが無理強くないようにしている。	週2、3回午後入浴を基本としており、日々の利用者の意向にそって支援している。洗髪や背中洗い、足洗い等を職員が手伝っており、ゆっくりと時間をかけて入ってもらっている。車椅子使用の方は男性職員2人で介助しながら入浴してもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者の各々の生活リズムで居室で休まったりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	介護記録に各々の服用する薬のファイルがある。服用するまで確認する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できるだけ笑ってもらえるような話題にしている。木の実趣味に合わせて支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出ドライブ外食の機会を設けている。機会は人手不足に為限られている。	昨年来、敷地内の散歩が中心で外出の機会が減っている。利用者からは買い物や外食の希望が多いが、人的体制面でなかなか要望に応えることが難しかったが、職員体制の回復に伴って、ユニット合同、ユニット別、個別対応等を組み合わせでドライブなど外出の機会を増やすこととしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で管理できる方は所持。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人希望により支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節行事に応じた飾りつけをしている。	両ユニットの仕切りを外し、ホールを広く活用できるようにし、利用者は一緒に過ごしている。食卓を中心にゲームをしたり歌を歌ったり、テレビを前にソファでくつろいだりしている。エアコンで空調や湿度も適切に管理されている。季節に合わせた飾り付けをして、アットホームで居心地のいいホールになるよう配慮されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールにはテレビ周辺にくつろげるソファがあり自由に過ごせる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は本人の使い慣れたものを持ってきて居心地よく過ごしている。	ベッド、クローゼット、洗面台、エアコンが備え付けられ、持ち込みの所持品は小タンスや収納ボックスに整理されるなど、簡素で清潔な居室になっている。家族写真や趣味用品を揃え自分の部屋として個性を出している。テレビを備えている人も多い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示には分かりやすいように考慮し居室には名札を吊るしてわかり易くしている。手すりの設置。		